

九州地区大学体育連合／九州体育・スポーツ学会 合同企画
(九州体育・スポーツ学会第70回記念大会 ランチョンセミナー)

コロナ禍にある今、大学体育授業の「不易流行」を考える

【話題提案者】

福岡大学 築山泰典

福岡大学 藤井雅人

【企画・司会】

九州地区大学体育連合 企画委員長 藤井雅人

九州体育・スポーツ学会大会 企画委員長 田原亮二

趣旨

2020年以降のコロナ禍にあって、各大学での体育授業は大きな変革を余儀なくされてきた。それは例えば、ICTを活用した遠隔授業の実施であり、また密な接触を伴わず、強度の高くない活動への授業内容の変更であった。各大学および各教員のそうした創意工夫や努力が、コロナ禍にあって（いや、であるからこそ）大学体育授業の存在価値を証明することになったといえるし、またそのイノベーションの可能性をも提示することになった。ただ、そうした大学体育授業をめぐる新たな動きから少くない成果を得ることができた一方で、そもそもこの大学体育授業の根幹をなすもの、すなわちそこで達成されなければならないものとは何なのか、という根源的な問いをこれまで以上に意識することにもなったと思われる。本企画では、コロナ禍にあって特に方法論の側面で新しい模索を続ける授業実践、および大学体育授業の根幹的な価値をスポーツ教育学的視点から問う試みについて紹介することで、大学体育授業の「変わっていくもの」と「変わらないもの」という「不易流行」について考えてみたい。

（「九州体育・スポーツ学会第70回記念大会プログラム」より）

報告

本企画は、2021年8月29日（日）12時20分～13時30分に、Zoomを使用したオンライン形式で開催された。これまで本企画では実技研修を主に行ってきたが、昨年度から続くコロナ禍にあって、今回は、オンライン形式での実施への切り替えも可能な座学での研修の開催準備を進めてきた。実際に九州体育・スポーツ学会第70回記念大会がオンライン形式での開催に変更されたため、本企画もそれにならうことと

なり、36名がこのオンラインでの研修に参加した。

まず、企画・司会の立場から藤井により、前述した本企画の趣旨説明が行われた。次いで、築山が「教育手法を多様化する遠隔キャンプ実習の実践」について報告した。具体的には、通常自然環境におけるグループでの共同生活・活動によるキャンプ技術の習得、コミュニケーション能力やリーダーシップの育成が目指されることになるキャンプ実習を、ICTを活用して学生間のつながりを保ちつつ、主に個人での活動を基盤として学習できるプログラムによって遠隔実施した授業実践の報告であった。まさにコロナ禍であるからこそ開発された教育手法であったといえる。

こうしたイノベティブなキャンプ教育方法論に関する築山の報告を受けて、藤井が「大学体育授業の根源的な価値を考えるードイツスポーツ教育学における議論を参考に」と題し、「なぜ、どのように」大学体育授業が展開されるべきであるのかという、その根源的な価値への問いに関連して、ドイツでの議論でみられる「スポーツ種目」「行為能力」「心理・運動」「身体経験」といった各種の教授コンセプトの内容やその中での「健康」「感動」「表現」「達成」「緊張」「共同」というスポーツがもたらす6つの「意味」の位置づけなどについて報告した。

以上のように、本企画では、大学体育授業について、イノベティブな教育方法論という観点で「流行」が、また「なぜ、どのように」というその根源的な価値の観点で「不易」が論じられることとなった。今後の大学体育授業は、コロナ禍を経験し、こうした「不易流行」がますます問われることになると思われる。引き続き議論してみたいテーマである。

（文責：藤井雅人）

第9回大学体育スポーツ研究フォーラム報告

第9回大学体育スポーツ研究フォーラムに参加して



西日本短期大学 川 畑 和 也

令和3年2月22日（月）に「第9回大学体育スポーツ研究フォーラム」が開催され、コロナ収束が見えない中で、ZOOMによるオンラインにて実施されました。私は、「大学体育スポーツ研究フォーラム」へと名称を変更する前の、東京都目白大学新宿キャンパスにて行われた「第6回大学体育研究フォーラム」への参加以来の3年ぶりの参加となりました。第7、8回のフォーラムは東京都と新潟県で行われ参加が難しかったのですが、今回はオンライン開催ということで参加することができました。久々の参加に期待感を持ちながら当日は職場から参加いたしました。

今回のフォーラムでは、まず「VUCA時代の大学体育を探る」というテーマでシンポジウムが行われ、その後2つの会場にて、20演題の発表（研究発表10演題、事例報告10演題）が行われました。

研究発表・事例報告では、大学体育授業の開講状況や授業内容、教材開発に関する発表や、コロナ禍におけるオンライン大学体育授業の取り組みやそれらの効果や学修成果について検討をされたものが多い印象を受けました。コロナ禍において、学生の学びを止めないために各大学で先生方が実践された様々な取り組みを知ることができ、withコロナ、afterコロナを見据えた今後の大学体育スポーツや、私自身の今後の大学体育授業について再考する時間となりました。

シンポジウムでは、『VUCA時代の大学体育を探る——学生・教員を対象としたコロナ禍における体育授業の実態調査を踏まえて——』をテーマにシンポジストの西田順一先生（近畿大学）、木内敦詞先生（筑波大学）、難波秀行先生（日本大学）、佐藤和先生（千葉工業大学）、中山正剛先生（別府大学短期大学部）の調査結果を聴講しました。近年急激に変化し予測不可能な社会環境を表現する言葉である「VUCA（ブーカ）」という状況における体育授業の在り方を、受講者の学修成果の把握や教員の授業実践の可視化という観点からお話をいただきました。遠隔授業の学修

成果は、従来の授業と比べ低値を示す中で、繰り返し視聴できるオンデマンド形式のコンテンツの有効性や、「同時双方向型」の授業形態かつ「実技と講義の両方」授業形式の場合、ある程度学びが保証できる可能性、またそれは平時からの取り組みが重要であることをご説明いただき、私自身の授業方法に早速役立てることができる学びを得ることができました。さらに遠隔による体育実技方法について、対話やチームワーク、人間教育などの「これまでの目的を継承する」視点だけでなく、生涯にわたる健康の維持増進、ヘルスリテラシーの向上など「体育の目的をシフトする」という視点なども踏まえ、新たな実施方法を模索していく必要性についても考える機会となりました。

今回3年ぶりのフォーラムへの参加となりましたが、これまでと変わらず、全国各地から多くの先生方がご参加されており、先生方の発表やシンポジウムを通して、これからの大学体育スポーツに関して改めて考える有意義な時間となりました。例年のように、直接多くの先生方と意見交換をすることは難しかったですが、今後のフォーラムでは、ワークショップの受講や研究発表・実践報告などを通し、先生方との対面での交流ができることを楽しみにしています。今回のフォーラムの参加をきっかけに、改めて大学体育スポーツの発展に貢献できるよう、より一層研鑽を積んで参りたいと思いました。

最後になりましたが、コロナ禍の大変な中でこのような機会を作ってくださいました全国体育連合フォーラム運営委員長、副委員長で九州地区大学体育連合理事でもある、田原亮二先生、中山正剛先生をはじめとする多くの先生方のご尽力に感謝申し上げます。